【ノート】

大学初年次生が経験した高校「国語」の学習内容

――「学習指導要領」の指導事項と実際の指導状況――

島田康行（筑波大学）

大学で学ぶために重要と考えられる知識や能力は，高校においてどのように学ばれるのか，「国語」に関する内容について，大学初年次生を対象として調査した結果，「読むこと」に関する指導はよくなされている一方，「話すこと・聞くこと」「書くこと」に関する指導は十分になされていないことがうかがわれた。学習指導要領の改訂にともない，高校の授業はどのように変わるのか，今後，同様の調査を継続，拡大することで，入試改革にいっそう資する情報の提供が可能となる。

1 はじめに

1.1 背景

荒井克弘(2013)は，高校教育と大学教育との接続を下の［図1］のようなモデルによって示している。このモデルは，大学教育が，高校教育の上に積み上げられるわけではないことを示すとともに，大学での学びに必要となる知識や能力の一部は，高校教育において育まれることを示そうとしたものである。

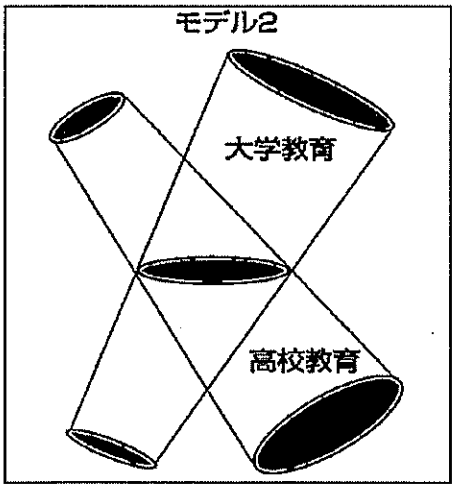

図1 荒井克弘(2013)によるモデル

それでは，たとえば高校の教科「国語」で養われる能力のうち，大学での学びに必要となる知識や能力とはどのようなものだろうか。高等学校学習指導要領「国語」（平成 21 年告示）は，「国語総合」の指導内容を「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の３領域と「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の１事項にまとめて提示する[1]。各領域には，たとえば次のように指導事項が列挙されている。

A　話すこと・聞くこと
　ア　話題について様々な角度から検討して自分の考えをもち，根拠を明確にするなど論理の構成や展開を工夫して意見を述べること。
　イ　目的や場に応じて，効果的に話したり的確に聞き取ったりすること。
B　書くこと
　イ　論理の構成や展開を工夫し，論拠に基づいて自分の考えを文章にまとめること。
　ウ　対象を的確に説明したり描写したりするなど，適切な表現の仕方を考えて書くこと。
C　読むこと
　ア　文章の内容を叙述に即して的確に読み取ったり，必要に応じて要約や詳述をしたりすること。
　ウ　文章に描かれた人物，情景，心情など

を表現に即して読み味わうこと。

一方，大学教育において求められるのはどのような能力か。たとえば，「大学における教育内容等の改革状況について」（文部科学省高等教育局，2011）によれば，平成21年度に「学部段階における初年次教育の具体的内容」として最も盛んに行われたのは「レポート・論文などの文章作法を身に付けるためのプログラム」(533／753校）であり，次に「プレゼンテーションやディスカッションなどの口頭発表の技法を身に付けるためのプログラム」(488校／753校）であった。多くの大学が初年次教育でこれを取り上げるのは，それが大学で学ぶために必要な能力であると考えるからであると同時に，入学時に学生が身に付けている能力では十分でないと考えるからでもあろう。

根拠に基づいて意見を述べる文章の書き方や，議論・口頭発表の方法などを学ぶことは，前掲のように，必履修科目「国語総合」の指導事項として明確に位置づけられている。高校「国語」で養われるべき諸能力のうち，これらの力は，［図1］のモデルにおいて高校・大学の教育がクロスする部分に含まれると考えられる。

1.2 問題の所在

しかし，多くの大学は，入学してくる学生のそのような能力を十分ではないと考え，場合によっては基礎的な内容から，あらためて学ぶ機会を設けているわけである。

では，彼らのそのような能力は，高校における「国語」の学習の中でどのように育まれているのか。ここでは高校「国語」の指導内容に注目し，高校卒業間もない大学初年次生に対する調査をもとに，高校「国語」の指導の実際を明らかにしようとする。

高校3年間に受けた「国語」（「国語総合」「国語表現」「現代文」など）の授業では、主にどのような指導を受けたと感じますか？　次の各項について「1 十分に指導された」～「5 ほとんど指導されていない」の5段階でお答えください。

1) 文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わうこと
2) 様々な問題について自分の考えをもち、筋道を立てて意見を述べること
3) 文章の内容を的確に読み取ったり、必要に応じて要約したりすること
4) 目的や場に応じて効果的に話したり的確に聞き取ったりすること
5) 文章を読んで、構成を確かめたり表現の特色をとらえたりすること
6) 課題を解決したり考えを深めたりするために、相手の立場や考えを尊重して話し合うこと
7) 論理的な構成を工夫して、自分の考えを文章にまとめること
8) 様々な文章を読んで、ものの見方、感じ方、考え方を広げたり深めたりすること
9) 優れた表現に接してその条件を考え、自分の表現に役立てること
10) 相手や目的に応じて題材を選び、効果的な表現を考えて書くこと
11) 論理的な文章について、論理の展開や要旨を的確にとらえること
12) 情報を収集、整理し、正確かつ簡潔に伝える文章にまとめること
13) 目的や場に応じて、言葉づかいや文体など表現を工夫して話したり書いたりすること
14) 国語の表現の特色、語句や語彙の成り立ち及び言語の役割について理解を深めること
15) 目的や課題に応じて様々な情報を収集し活用して、進んで表現すること

図2　質問：どのような指導を受けたか

2 方法

国立T大学において開講された平成 24 年度全学共通科目等の受講生のうち，1年生 104名（文系教育組織所属 43 名，理系教育組織所属 61 名）を対象として，質問紙による調査を行った。調査は，文章表現を課す入試の受験経験の有無，高校3年間の「国語」授業中における文章表現の経験，「国語」以外の教科等における文章表現の経験と，「国語」の授業で受けた指導の内容等の質問によって構成された。

このうち，本稿では高校「国語」の指導の実際を明らかにするという目的に即し，「国語」の授業で受けた指導の内容についての質問・回答に焦点を当てる。前頁［図2］に実際の質問を示す。

学生は，各項目について，指導されたと感じる程度を「1 十分に指導された」「5 ほとんど指導されていない」までの5段階で回答した。

実は，この質問の1)～15) の文言は，調査対象の学生が受けてきた教科「国語」（国語総合，国語表現Ⅰ，現代文）が拠って立つ「高等学校学習指導要領」（平成 11 年告示）における「指導事項」の文言をほぼそのまま引用したものである。

3 結果

回答状況を［図3］に示す。

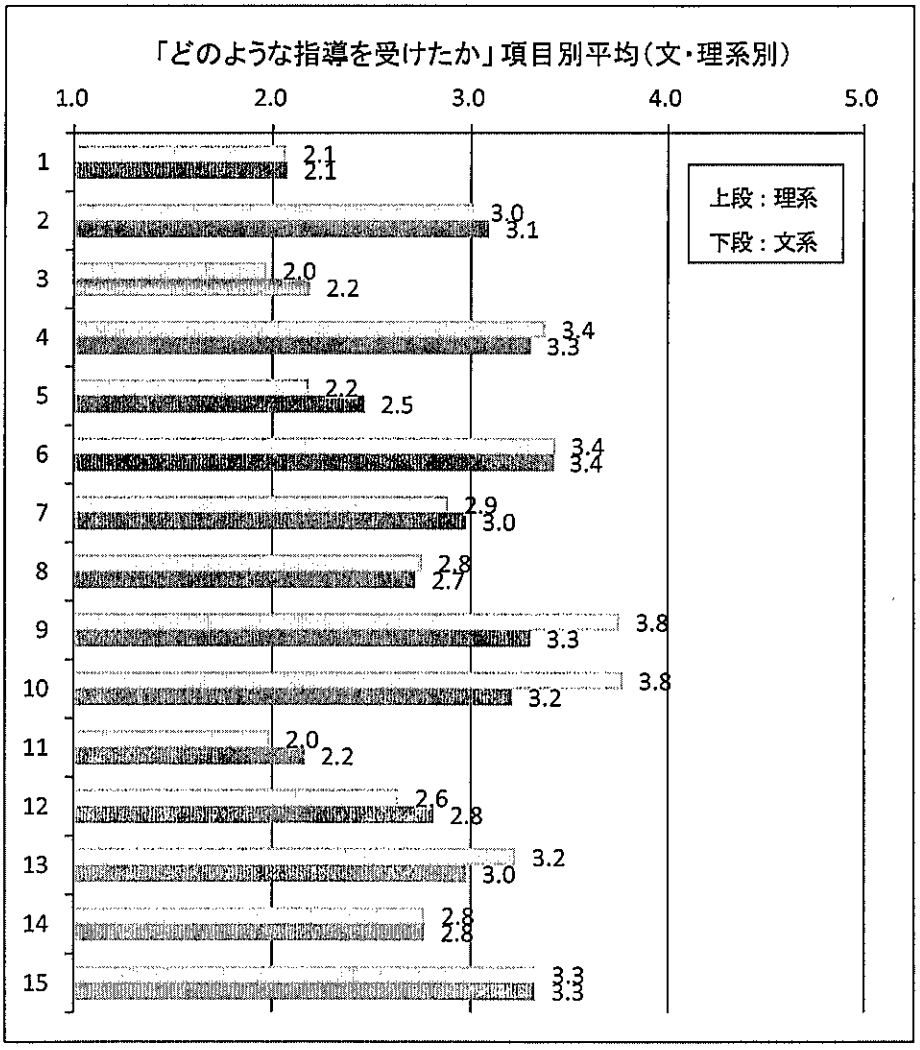

図3 回答状況:「国語」の授業で受けた指導の内容

項目ごとの平均をみると，文・理系どちらの教育組織所属の学生の回答もよく似た傾向を示した（［図３］）。

全体を一括して集計すると平均は2.87，標準偏差は1.20となった。1)～ 15) の各回答は，中央値が２から４，最頻値が１から４に分布した。

中央値が２となったのは1)，3)，5)， 11) の４項目で，それぞれの最頻値は1)，3)が１，5)， 11) は２であった。この４項目は平均値でも最下位（最小）から下位４位を占める。

このうち1)，3)，5)は必履修科目「国語総合」の「読むこと」の指導事項に， 11) は選択科目「現代文[2)]」の指導事項に基づくものである。この４項目それぞれの回答の分布を［図４］に示す。

一方，中央値が４となったのは6)，9)，10) の３項目で，6)， 10) は最頻値も４であった。平均値でもこの３項目が最上位（最大）から上位に並ぶ。平均値でこれに次ぐ項目は4)， 15) である。

4)，6)は「国語総合」の「話すこと・聞くこと」の指導事項に，9)， 10) は「国語総合」の「書くこと」の指導事項に基づいた項目である。また 15) は「現代文」の指導事項を基にした，課題探究的もしくは調べ学習的な内容である。

平均値の上位４項目それぞれの回答の分布を［図５］に示す。なお 15) の分布は4)とよく似ている。

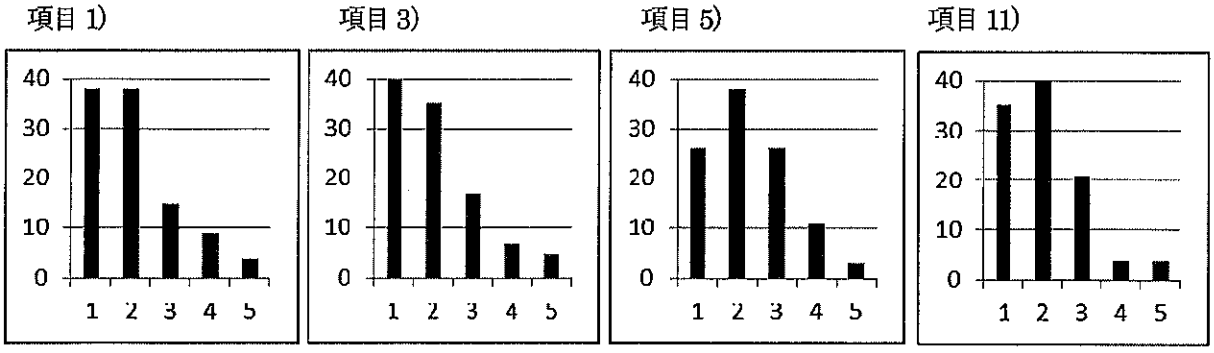

図４ 回答の分布(1)

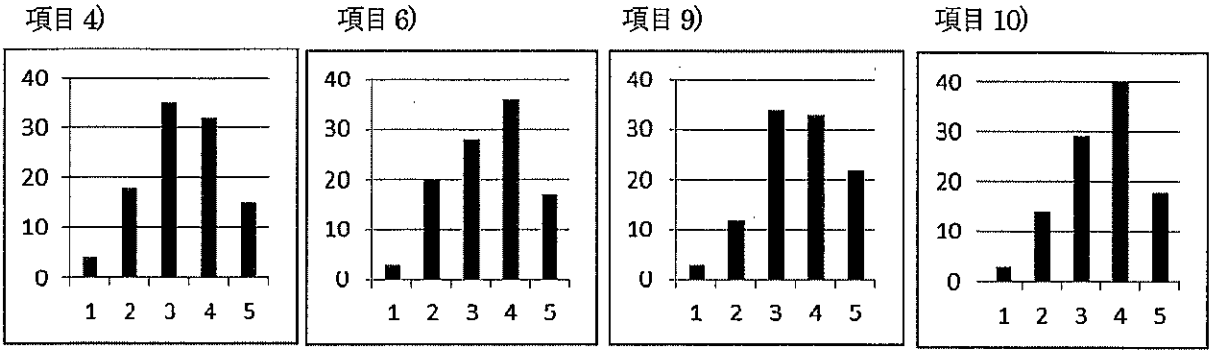

図５ 回答の分布(2)

4 考察

4.1 全体の傾向

［図３］から見てとれるように，全体の回答の傾向は文・理系でよく似ている。質問の1)～ 10) は必履修科目「国語総合」の指導事項に基づくものである。この科目は１年次に履修する場合がほとんどであり，多くの学生

は文・理のクラス分けが行われる前にこの科目を学んでいると考えられる[3]。

そして，この回答傾向の近似は，進学校での実際の指導における重点の置かれ方や授業の形態が，きわめて均質なものであることを示唆している。

その背景には，採択率が大きないくつかの教科書の内容が，互いによく似ていることの影響もあるのかもしれない。

一方，文・理系の別で回答の傾向にやや差があった項目に9)，10)がある。両項目で，理系の平均値が文系のそれを0.5ポイント以上，上回っている。この2項目の回答分布を［図6］に示す。

中央値を見ると，両項目で文系は3であるのに対して理系は4，最頻値も理系は両項目で4であり，9)が3，10)が4の文系クラスとは様相が異なっている。

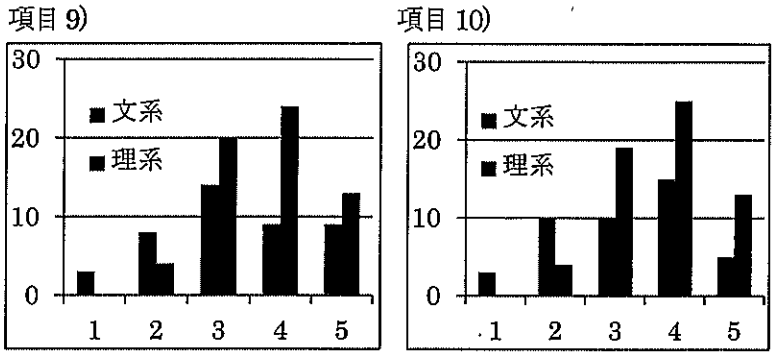

図6 回答の分布(3)

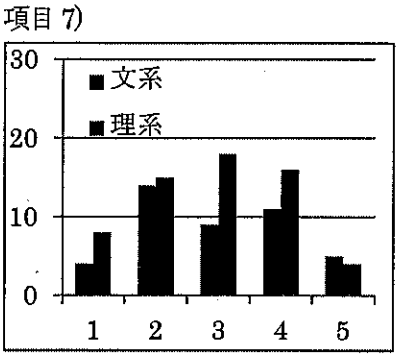

図7 回答の分布(4)

4.2 学ばれていること／いないこと

学生は，1)，3)，5)，11)，すなわち「読むこと」の指導事項に該当する内容を相対的によく指導されたと感じ，4)，6)，すなわち「話すこと・聞くこと」，9)，10)，すなわち「書くこと」の指導事項に該当する内容は十分に指導されていないと感じている。その差はかなりはっきりしている。

また，9)，10)については，文・理系の間でも差があり，理系の学生は十分に指導されていないと感じる傾向がより強い。

「国語総合」，また「国語表現Ⅰ」「現代文」等を含めて，「国語」の授業では「読むこと」の指導がよく行われている一方，「話すこと・聞くこと」「書くこと」の指導は十分になされていない，少なくとも学生はそのように感じていることが指摘できる。また，こうした傾向が，進学校を中心に一般的になっていることも指摘できるだろう。

9)の「優れた表現に接して…自分の表現に役立てる」ことや，10)の「相手や目的に応じて…効果的な表現を考え」ることは，文章の種類を問わず，場に応じて的確・適切・効果的に書くことを主体的に学ぶ能力の育成という点で，「書くこと」の根幹にかかわる重要な学習内容である。もちろん論理的な文章表現の学習にも欠かせない内容である。

一方，同じ「書くこと」の指導事項に基づく項目でも，7)は9)，10)に比べて，やや指導がなされたと感じられている。回答の分布を［図7］に示す（中央値3，最頻値2）。

この項目の内容は「論理的な構成を工夫して，自分の考えを文章にまとめること」である。その文言からは「小論文」の練習のような学習も想起されるが，9)，10)のような学習が十分になされなければ7)の効果も上がらないだろう。

実は，同じ質問紙で行った別の質問項目への回答によると，高校において一律に課される民間の「小論文模試」を受験した経験のあ

るものが 69 %，「小論文」の書き方を学ぶ「授業」があったと答えたものが 38 %，「小論文」の個別指導を受けた経験のあるものが 38 %に上っている。

「国語」の授業において「書くこと」の指導が重視されない状況がある一方で，大学入試「小論文」への対応が進められている。文章表現の学習の契機が入試への対応に偏っていることが窺われる。

ちなみに，よく指導されているものの一つである3)は「読むこと」の指導事項に基づく項目だが，その内容は「必要に応じて要約すること」である。近年の大学入試「小論文」の出題傾向が「要約」に傾きつつある[4]ことの関連から注目しておきたい。

4.3 「教育課程実施状況調査」との関連

今回、調査票の質問項目に文言を利用した高等学校学習指導要領（平成 11 年告示）のうち「国語総合」の実施状況については、国立教育政策研究所による大規模調査（平成 17 年度教育課程実施状況調査）がなされている。

高校生約 15 万人を対象としたこの調査の結果，「理由や根拠を基に自分の考えを記述する問題で無回答が多い」ことが特色として指摘されるなど，「書くこと」に課題がある高校生の実態が浮かび上がった。そして「自分の考えを筋道立てて分かりやすく表現することができる力（論理的表現力）」の育成が「喫緊の課題」として位置付けられた。

また，この調査では，教科の指導を担当する教師にも同時に質問紙調査が行われた。それによると「説明や意見などを書くこと」を「指導している」と回答した教師は 98 %（804 人中 788 人）に上ったが，その内容が「生徒にとって理解しにくい」ものだったと回答した教師が22.7%（778 人中 179 人）と，「理解しやすい」ものだったという回答 23.1%（182 人）と拮抗した。

さらに，その内容が「生徒は興味を持ちにくい」ものだったと回答した教師は40.6%（778 人中 320 人）に上り，「興味を持ちやすい」ものだったという回答30.2%（238 人）を上回った。

これらの結果は，「説明や意見などを書くこと」について「指導はしているが，その内容には生徒にとって理解しにくい部分もあり，生徒を主体的な学びに向かわせるには至っていない」という教師の声を伝えている。大学初年次生たちが「十分に指導されていない」と感じた「書くこと」の指導について，教師側もまた，十分ではないという認識をもっているのである。

一方，実施状況調査の対象となった高校生の 75 %以上は，「普段の生活や社会生活の中で役立つよう，勉強したい」「入学試験や就職試験に役立つよう，勉強したい」と考えてもいる。理由や根拠を基に自分の考えを書くことや，説明や意見を書くことが，入試のみならず社会生活にも役に立つということ，あるいはよりよい社会生活のためには不可欠であるということが，高校生に明確に意識されるような指導が望まれよう。

5 おわりに－入試改革に向けて

調査を通じて，高校「国語」の指導内容のうち「話すこと・聞くこと」「書くこと」に関するいくつかの事項について，対象の大学初年次生が「あまり指導されていない」と感じていることが明らかになった。

大学の学習が，主体的に課題を設定し，調査し，議論し，考察し，発表し，研究としてまとめる，そのような一連の過程のうちにあるならば，「あまり指導されていない」各事項は，大学での学びにとって重要な，すなわち高大の教育内容がクロスする部分に位置づくものと考えられる。

そのことを，入試プロセスの全体を通して「大学での学びにはこういう知識，能力が必

要だ，という具体的なメッセージ」として示すことが重要である。

そのメッセージは適切に発信されているだろうか。大学で学ぶ上で重要な資質や能力が「読むこと」に関する内容に偏って捉えられかねない状況はないだろうか。もしあるならば，そうした状況は早急に改善されなければならない。

改訂された学習指導要領では，各教科における「言語活動の充実」が強調されている。その実施にともない，高校「国語」の指導はどう変わっていくのだろうか。

今後，調査の対象を全国の大学に広げ，観察を継続することで，大学入試の改革や入学後の教育にいっそう有用な情報を提供していくことが可能になるだろう。

注

1）3領域1事項の構成は，平成 11 年告示の学習指導要領から継承されている。

2）「現代文」は「近代以降の様々な文章を読む能力を高める」ことを目標とする選択科目である。

3）高校における文・理のクラス分けは2年進級時に行われる場合が多く，調査対象の学生は文系 43 名中 36 名が文系クラスに、理系 61 名中 55 名が理系クラスに所属していた。なお，必履修科目に「国語表現Ⅰ」を設定する高校は少なく，とくに進学校では皆無に等しい。

4）島田康行 (2012a) による。

参考文献

荒井克弘(2013)「高大接続と大学入試改革のゆくえ」『月刊高校教育』46-1，32-36

国立教育政策研究所(2007)「高等学校教育課程実施状況調査概要・集計結果・科目別報告書」
〈 http://www.nier.go.jp/kaihatsu/kyouikukatei.html〉 [accessed on 20 Dec.2013]

文部科学省高等教育局(2011)「大学における教育内容等の改革状況について」
〈 http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/1310269.htm 〉 [accessed on 20 Dec.2013]

島田康行 (2012a)「大学入試『小論文』の10 年－出題傾向の変遷に関する考察－」『大学入試研究ジャーナル』 22 ,

島田康行 (2012b)『「書ける」大学生に育てる― AO 入試現場からの提言』大修館書店

渡辺哲司(2013)『大学への文章学』学術出版会

本稿は，日本学術振興会科学研究費助成事業学術研究助成基金助成金（基盤研究(C))23531156「高大接続場面における『小論文』等を契機とする文章表現の学習に関する研究」による成果の一部である。